



青少年消防オリンピック

(一財)自治体国際化協会ロンドン事務所 所長補佐 浅野 晃彦 (真庭市派遣)

2017年7月10日から15日までオーストリア共和国のフィラッハ市でヨーロッパ青少年消防オリンピックが開催され、日本の少年消防クラブのメンバーが出場しました。地元消防団での活動経験のある筆者により、少年消防クラブ員たちの国際舞台での活躍を紹介します。

青少年消防オリンピックとは

この大会は、ヨーロッパ各国を中心とする国際消防救助組織である国際消防救助協会（CTIF）が2年に一度開催する国際大会で、毎回加盟国（38カ国）が会場を持ち回りで開催しています。21回目となる今大会には世界27カ国から59チーム、約600人の青少年が参加しました。

(公財)日本消防協会と(一財)日本防火・防災協会は、少年消防クラブのさらなる活動の推進、国内外における少年消防クラブの交流拡大を目的に、これまで第17回(2009年)、第20回(2015年)の大会に派遣しており、今大会で3度目となります。歌津中学校少年防災クラブ(宮城県南三陸町)、成城消防少年団(東京都世田谷区)、府中町少年少女消防クラブ(広島県府中町)、くすばし少年消防クラブ(福岡県北九州市)の中学1年生から高校1年生までの20人と指導員4人が参加しました。

競技は、1チーム9人編成と規定されているため、20人のうち18人がJAPAN1とJAPAN2でエントリーすることになり、2人は多国籍チームのINTERNATIONAL1とINTERNATIONAL4でエントリーしました。「消防障害物競技」と「400m障害リレー」の2種目の合計得点を競います。「消防障害物競技」では、チーム全員の9人が一斉にスタートを切り、直線上の

火点(放水の的)目掛け、障害物を抜けながらホースを延長し、手押しポンプからの一定量まで放水し、器具の照合またはロープ結索をして全員が定位置に整列してゴールとなります。

また、「400m障害リレー」では、消防ホースの筒先をバトンに見立て、高さ2mの壁越え、消火器やホースの搬送などを行いながらバトンをつなぎ、アンカーが走りながら筒先をホースにつないでゴールするというものです。

参加者の年齢が12歳から16歳までと身体能力の差が記録に出やすくなることから、「400m障害リレー」では、各チームはその平均年齢に応じて基準タイムが設定され、結果タイムとの差1秒ごとに1ポイントが加減点されます。



翌日の本番に向け、気合十分の選手たち

本番さながらのリハーサル

7月12日午前9時、リハーサルが行われる大会会場を訪れると、既に各国のクラブ員が本番さながらに各種目のリハーサルを行っていました。リハーサルの順番もプログラム通りに行われ、競技審査員や選手たちの表情は真剣そのものでした。音楽(ロックやポップスを中心)

やアナウンス、テレビカメラを回してのインタビュー等も行われ、会場のムードもリハーサルとは思えないくらいに盛り上がっていました。日本の消防操法訓練大会しか知らない筆者にとって、この一種のスポーツイベントのようなムードは新鮮でした。

会場の応援スタンドでは、リハーサルの出番を待っている日本代表チームの選手たちの姿があり、全員が真剣な眼差しで他国のチームのリハーサルに見入っていました。というのも、この日が本番会場での初めての練習とあって、グラウンドコンディションや実際に競技で使われる消火器、障害物設備のチェックも入念に行える唯一のチャンスだったからです。



本番さながらのリハーサル風景

消防器具の違いに戸惑いも

選手たちは、大会前2カ月間、中学校や地元消防団等の協力のもと、それぞれのクラブで訓練を積んできました。しかし、本番でのチーム編成は9人。つまり会ったこともない4つのクラブが2つのチームを編成することになり、それぞれのパートが連動するイメージで練習しあうことになります。さらに選手たちだけでなく指導員も悩ませたのが、日本のものとは仕様の異なる消防器具でした。火点や消防ホースのカップリング（接続金具）、さらには競技ルール上のホースの巻き方まで日本仕様とは異なっていたため苦勞の連続だったそうです。また、あらかじめ手に入らない器具はイメージトレーニングで補ったそうです。4つのクラブが国内で集まり練習できたのは、2日間のみでした。

このように日本チームにとっては明らかに不利な条件ばかりでしたが、こうした事情を察してか、リハーサル終了後には、大会審査委員側が日本選手団に対して競技

上での採点のポイント等を丁寧にレクチャーしてくれる一幕もありました。

夕方6時から行われた開会式では、日本選手団は応援団の声援に元気よく国旗を振り応えていました。



入場行進する日本選手団

大会当日の健闘

翌13日、会場のリンドスタジアムは、競技開始早朝から各国の応援団や地元フィラッハ市民らが詰めかけ、前日以上の熱気に包まれました。



応援の様子

前日の調整が首尾良く行えたのか、何れのチームも自分たちのベストタイムを更新するなど、これまでの練習の成果を遺憾なく発揮することができました。また、多国籍チームとして出場した選手たちも言葉の壁をもともせず、他国の選手たちと見事な連携プレーを見せてくれました。

競技を終えた選手たちは応援席に戻ると、他国の選手たちと仲良く記念撮影を行うなどリラックスした様子でお互いの健闘を称え合っていました。

選手たちからは「自分たちと同じ（消防クラブ）活動

をしている選手と交流ができ、これからも励みになる」、「とても緊張したが、海外でこうした経験ができたことで自信がついた」などの感想が聞かれ、長い練習の成果を発揮できたことに感慨も一入のようでした。



本番当日の競技の様子

街を挙げての歓迎

一方、会場から車で10分ほどのフィラッハ中心街では露店が立ち並び、広場では野外コンサートが行われるなど街を挙げての歓迎ムードに包まれていました。また、目抜き通りにはいくつもの大型消防車両が展示され、観光客や市民の耳目を集めていました。

大会期間中、サテライトイベントとして市内各所でさまざまな少年消防クラブの交流イベントが開催されました。その中の各国のお国自慢大会で日本選手団は、「よさこいソーラン」を披露し、会場を大いに沸かせ、参加25カ国中3位を獲得しました。また、参加国の歴史文化を紹介する展示会場では、選手たちが折り鶴の実演を行ったり、団扇を配ったりと地元市民や各国の選手たちとの親睦を深めていました。



お国自慢大会で「よさこいソーラン」の入賞に喜ぶ選手たち



展示会場ブースで日本の文化を紹介する選手たち

国内でも広がる交流の輪

少年消防クラブは1950年以降、全国的に設置、普及が進み、現在では約4,500団体、約41万人がクラブ員として活動しています。設置当初は、国民の幼・少年期における火災予防の知識を啓蒙するための活動が主な目的でしたが、洪水、地震等の自然災害での教訓から、火災のみならず、防災全体に及ぶ活動へと発展、充実してきました。

地域における少年消防クラブの活動は、地域単位や学校単位で行われていますが、そうした場合にも地元消防署や消防団の熱心なサポート抜きには語ることができません。また、その活動は、子どもたちの地域社会への参加や郷土愛といったものを育む実践の場として重要な活動となっており、ますます活発になることが期待されています。

将来の地域防災の担い手育成を図るため、総務省消防庁、(公財)日本消防協会、(一財)日本防火・防災協会が2012年から年1回開催しているのが「少年消防クラブ交流会」です。ここでも青少年消防オリンピックでの経験が競技に活かされています。参加した少年消防クラブ員たちは消防技能の形式を取り入れた競技や避難所訓練等を通じて他の地域のクラブ員たちと親交を深め、消防団等から被災経験や災害への備えを学んでいます。

こうした少年消防クラブ同士の交流が、やがて地域全体、ひいては日本全体の予防消防・防災の意識向上につながっていくことでしょう。